

デューイ宗教論における「理想」概念の検討

—— 適応の切れ目へのまなざし ——

梶川 萌

研究室紀要 第42号 別刷

東京大学大学院教育学研究科 基礎教育学研究室

2016年7月

デューイ宗教論における「理想」概念の検討

——適応の切れ目へのまなざし——

梶 川 萌

1. はじめに

本稿は、アメリカの教育思想家ジョン・デューイ (Dewey, John 1859-1952) の宗教論における「理想」概念を検討することを通じ、彼の宗教論の構造を理解することを目的とする。デューイの思想は、事物や人間を孤立したものとして理解するのではなく、「協同 (communication)」や「参加 (participation)」を鍵概念としながら、人間と事物、あるいは人間と人間をその相互の関係において把握しようとした点で特徴的である。この関係を実体化し固定化することをデューイは敏感に回避しようとし、そうした態度は彼の宗教論をも貫いている。しかしこれまで、宗教論の主要課題が宗教概念の脱実体化であり宗教的経験の关系的な捉え直しであることは確認されつつも、そうした捉え直しを可能にするデューイの議論展開自体の検討は十分になされてこなかった。こうした状況に鑑み、以下では、宗教概念や宗教的経験のデューイ的解釈の鍵を握るものとして、とりわけ「理想」概念の脱実体化という議論に着目する。「理想」概念についての思考が、デューイにおいては、民主主義や人間中心主義、さらにはいかなる取り結ばれ済みの関係についての思考ともまずは異なって展開されていくことを踏まえつつ、本稿は、脱実体化された「理想」を論じる彼の理路をたどりその構造を明らかにすることを試みる。

1.1 デューイにおける宗教の問題と理想

デューイは敬虔で厳格な福音派信徒の母親のもとで育った。彼がバーモント大学進学のために実家を離れた際には、より自由な宗教的雰囲気を好意的に受け止めたことがよく知られている。しかし1892年以降、デューイは「神 (God)」を表立って語ることをやめ、彼のテキストからは宗教的な語彙の影が薄れていく。とはいえ宗教への関心がデューイの中で薄らいだとは言い難く、この関心はむしろ沈潜しな

からデューイの思考を駆動し続けていくと見る論者もいる (Rockefeller 1991: 216, 田中 2011: 141)。実際、教育論の構想期にも、またその後形而上学的思考を洗練させていく時期にも、「神」「信仰」といった言葉は、時折彼のテキストの表面へ浮上する¹⁾。

デューイの生きた19、20世紀アメリカにおいては、ダーウィニズムが一世を風靡し自然・社会科学が劇的に進展していた。他方で伝統的な宗教は、人々の共同体生活を包み込む予め共有された文化としての特権的地位を失いつつあり、社会の論争点となっていた。この意味で、『確実性の探求 *Quest for Certainty*』(1929)の最終章で部分的に開示されたデューイの宗教に関する議論は、当時のアメリカ知識人の注意を引いた (Dykhuisen 1973: 263=三浦、石田訳 1977: 378-379)。同書の成功もあり、デューイは1933年に当時のイェール大学学長であった旧知のエンジェル (Angell, James R. 1869-1949) から、翌年のテリー財団 (The Dwight Harrington Terry Foundation) 基金による講演依頼を受ける。この全3回のテリー講演に修正が加えられたものが、『共通の信仰 *A Common Faith*』(1934、以下CF)であり、デューイ唯一の宗教論的著作である²⁾。

CFはデューイが自らの宗教に関する思考を理論的に展開した著作として、彼の思想の中で固有な位置を占める。その主要なテーゼは、ひとまず、「宗教対宗教的 (religion versus the religious)」という第一章のタイトルに象徴されるといってよい。彼の主張を極めて簡略化すると、実体的組織や固定的な教義をともなう制度としての宗教から、人間の経験の中にある「宗教的な (the religious)」性質を切り離しつつ、後者を強調するものとして整理できる。「理想的」目的とその時点で顕在化しているものとを近づけようと努めること、この動的な人間のあり方を、デューイは「宗教的な」態度と名付けた (CF: 18)。人間は、現在与えられている諸条件からよりよい可

能性としての「理想的 (ideal)」なものを描き、想像し、この「理想的」な目的へと向かって現在ある諸条件に働きかけ修正していくことができる。「宗教的な」態度あるいは経験の要になるのが、「理想と現実、顕在的なものと可能なものとの統一」であると言われるのは、こうした理解にたったときである (CF: 13)。

この簡略化した説明を逆に辿ってみれば、この「統一」は、彼なりの「理想」概念の再解釈において初めて可能となることがわかる。伝統的に「理想」なるものは、決して届かない彼岸にあるものとして描かれてきたが、これを現在すでにある条件から示唆され想像されうるものと位置づけることにおいて、デューイはすでに「理想」と「現実」を触れ合わせているのだ。したがって、この触れ合いを彼がどのように説明していくのが、直ちに問われなければならない。デューイ自身、捉え直された「理想」に対する献身としての「信仰 (faith)」を、同書のタイトルでもある「共通の信仰」の核心に位置付けているが (CF: 23)、それにもかかわらずCFにおける「理想」の議論はこれまで、「宗教的」なものをめぐる主張の陰に隠れて十分に検討されてこなかった状況がある。次節では、本稿が検討する「理想」概念に関わる範囲で、そうした研究の状況と問題点を概観しておこう。

1.2 「理想」をめぐる議論の後景化と、その問い直しの文脈

“固定的で先験的な「理想」から「理想的」な目的へ”というデューイの議論は、“固定的な制度宗教から「宗教的」な経験へ”という彼の主張と、基本的には同型である。先に見たとおり、固定的でなくあらかじめ決められていない「宗教的」態度は、これもまた固定的でない「理想的」目的との関わりからまず定義されていくのであり、二つの再解釈の主張は前者が後者を支えることで連動する関係にある。このとき、ともすればデューイの企図した脱実体化への転換は、方向を失い、宙づりになるかのような不安を生じさせる。こうした不安に対し一定の答えを与えようと試みる論者によって、これまでCFの読解にデモクラシーやヒューマンズムの概念が援用されてきた。

たとえば、デューイ研究者のS.C.ロックフェラーは、デューイの宗教についての記述の変化を継時的

に整理した大著の中で、デューイの立場をDemocratic HumanismあるいはReligious Humanismと端的に表現する (Rockefeller, 1991)。この見解においては、「超自然的な神」を拒否するという意味での「人間主義」が唱えられるとともに、人間同士の協同的な生の様態としてのデモクラシーと、未来の可能性として描かれる目的と人間との相互的な修正・応答関係としての「宗教的」な態度とが重ねて理解されている (Rockefeller, 1991: 490)。また、戦後の日本でデューイの思想を包括的に紹介しようと努めた鶴見も、デューイのデモクラシー論と宗教論を重ねながら、民主主義社会の持ちうる道徳的倫理的理想をデューイが描いたものとして、CFを位置付けようとする (鶴見, 1984)。

たしかにデューイはCFの締めくくりで、人類が共有する義務と信仰を語り、現在生きる人間たちが「連続と続く人間の共同体 (the continuous human community)」 (CF: 57-58) の恩恵に与っている事実を指摘するとともに、その恩恵を次の世代へと受け渡すだけでなくより拡張していく責任があると論じている。CFの議論自体がこうした表現へと行き着く以上、ヒューマンズムや、デューイ自身が称揚するデモクラシーという協同的な生の様態に、その理路全体が引きつけて読まれることには一定の妥当性があるだろう³⁾。しかし非固定的な概念としての「理想」を宙づりの不安から救い出そうとするこれらの試みは、デューイ自身が理想的と価値づけたものを見ようとする一方で、デューイ的な「理想」の存立様態を問うてこなかった。

このことは、「宗教」概念とともに「理想」概念も再解釈されていることを検討するなかで田原が、「デューイの理想は経験の上空高くはばたいていつてしまう可能性」を持つと批判するとき、明らかである (田原 1988: 135)。そこでは、脱実体化された「理想」概念が、何でもありうるがゆえに何でもなくなり、人間の実際の生との関わりを弱め、喪失してしまうことへの危機感が表明されている。ロックフェラーや鶴見においては、「宗教」のデューイ的解釈が政治論の補強と位置付けられ評価されるが、その位置付けを強調する中で「理想」の組みかえは忘却されていく。しかし、何を理想とするのかを抜きにして「理想」概念を論じることは、田原が指摘したような困難さを抱えている。このアポリアをデューイ自身はどのように超えようとしたのだら

うか。何でもありうる「理想」は、どのような時に、どのようにして、それとして人に見出されるのだろうか。

さかのほれば森田 (1999) がそのデューイ研究において明らかにしたように、デューイはあらゆる概念を関係において定義しようと試みた。この関係というデューイの視点は、今も教育哲学のアクチュアルな問題であり続けている。たとえばオランダの教育学者ビースタ (Biesta, Gert) や日本の教育哲学者の田中の作業は、「参加 (participation)」や「相互活動 (interaction)」「協同 (cooperation)」をキーワードに、デューイが関係を提示するそのやり方をより繊細に描きなおす試みとして位置付けられる (Biesta 2013, 田中 2015)。

ビースタはデューイの教育思想を「参加 (participation)」の思想と捉え、情報や事物が単に受け渡され伝達されるようなコミュニケーションとは異なって、やり取りされるものも参加する人もそれを通じて変容していくような関係に埋め込まれた有機的ダイナミズムとしてのコミュニケーションを描いた。彼がデューイの「参加」を評価するのは、「参加の質」がデューイにおいては問題にされていたという点である (Biesta 2013: 42)。このようなビースタの研究はデューイの「コミュニケーション」を開かれたままに受け止めつつ、なおそこに、開けに蹂躪されることなく質を問い直す視点が編み込まれていることを明らかにしたものだ。また田中は、キリスト教のアガペーをデューイの思想の根底に見とることで彼の思想を描きなおしている (田中 2015)。田中においては「相互活動 (interaction)」は単に複数の人間や事物が参入してなされる活動以上のものであり、そこでなされるのは「相互に呼応しあうこと」である (田中 2015: 40)。そこでは「呼応」すなわち、呼びかけがなされ応答にまた応えていくという根本的関係についての理解を、デューイの「コミュニケーション」解釈にも敷衍することで、いかなる形式にも収まりきれないその都度固有な関わりとしての人間の協同的営為が説明される。

これらの研究は、デューイの議論の主軸となる人間と事物、人間と人間との関係——彼らのデューイ論の鍵概念に即して言えば「協同」や「参与」という関係的あり方を、「いかなる関係なのか」「何が関係を可能にするのか」という問いを挟むことで、より繊細に語ろうとする試みである。「理想」の具体的

な内容を問うのではなく、「理想」と人間の生との関わりを見るという本稿の試みも、こうした「関係」という視座を共有している。それにもかかわらず関係全般を射程に収めるものではないことに、あらかじめ注意を喚起しておきたい。「理想」の理論を辿ることは、「理想」なるものの経験とそうでない経験との峻別をその中核に含んでいる。まずは次章で、「理想」についてデューイが提起する新しい理解を検討することから始めたい。

2. 理想の関与とその場

2.1 関与する力としての「理想的」なもの

宗教論において、「理想」はそれ自体で内容を持つものとは捉えられず、「理想的 (ideal)」という形容詞へと言い換えられる。このシフトの意図を、デューイは、「理想的」性質を先験的かつ世界外的なものから解放することだ、と説明する (CF: 19)。彼のいう「理想的」なものは、未来における「可能性」にほとんど等しい (RP: 148-149=清水訳: 130-131)。ここで「理想的」は世界に外在するのではなく、世界のうちにある人間がすでに得られた経験をもとに、またそのうちで、見出し描いていくものとされる。この意味で「理想的」なものは「世界に根を持つ (rooted)」 (CF: 33) と形容されることになる。ただし留意されるべきは、現在顕在化していないあらゆる可能性がそのまま理想的性質を持つとみなされてはいない、という点である。「理想的」な性質は、基本的には未決定で開かれたものとされながら、特定の性質、すなわち、関与 (intervene) 的性質によって規定されることになる。

デューイの議論をたどろう。彼は「理想的」なものとは「想像 (imagination)」を通じて感得されるとする (CF: 14)。一般的な用法では、想像はときに単なる妄想や夢想をも意味するが、彼がここで指すのは、「新しいものを芽生えさせるような、存在物を再配置する考えを理解する力」 (CF: 33-34)、言い換えれば、既に顕在化している事物や条件を新しい「目的」のために考え出された新しい関係のうちで捉え直す力である。この力によって描かれたものは、人間にたいする魅了や訴求の効果を持つ (CF: 30)。この影響力において人間は、実際に突き動かされていくことになるのであり、こうした動的な関わり合いを強調してデューイは「関与する想像 (imagination

that intervenes)」(CF: 13)と表現する。この「関与」という視点はそのまま、「理想的」なものを、可能性一般から区別する視点でもある。

「理想的」なものの「関与」的性質は、複数の価値が葛藤する現実の場面を考慮すると理解しやすい。「理想的」が開かれたものである以上、ある人にとって複数の目的や価値が同時に「理想的」なものとして浮かびあがってくることは当然ありうることであり、ともすればそれらが互いに対立し葛藤することも十分考えられる。しかしこの状態はなんら不自然ではない。それらの「多くの目的は、我々を掻き立て、捉えて離さないという理想的あるいは想像的な性質において一つである」(CF: 29)ためだ。たとえば、正義や思いやり、秩序といった形で人間に感受される価値がある(CF: 32)。人間にとってこの「統一」は、「想像」を通じて「献身的で熱心に」ならざるをえないような理想的諸価値の総体として感受される(CF: 29)。「想像」によって感受される「理想的」目的や価値の総体は、人間に実際に関与し変化を与えるという力において、確かなものだ。「理想的な諸目的の実在性は、行為における、それら目的の拒否できない力によって、保証される(vouch)」(CF: 30)のである。

2.2 行為という準拠点

人間の「プラクティカルで感情的な諸態度」(CF: 30)、すなわち行為に具現化される道徳的な態度や熱心で献身的な態度が、一つの具体的に示される態度のうちにとけ合い調和する。このとき、多様な目的や価値は多様なままでなお統一的に把握されており、個別具体的にあらわれ人間を魅了する目的を貫きつなぐ糸として「理想的」すなわち「関与」という性質は機能している。それだからこそ、佐野(2003)が整理したように、人間における態度の調和は、理想目的の力によっておのずと要請されるものとして浮かび上がる。具体的にいえば、この「統一」の様態は、諸々のありうる態度や行為の選択肢が、一人の人において真摯な努力という一つの態度として現れた状態であると考えられる。具体的な目的が多様に設定されるとしても、それらの諸目的は強い「関与」する性質を共有し、それらへと向かうよう人間を触発し鼓舞する。「理想的」なものは、デューイにおいては具体的な目的や価値命題ではなく、いまだないにも関わらずそれを描かせそれへ向かわせる

という「関与」する力にほかならない。

以上のようにデューイは、人間が状況の中で行為し活動する際に働きかける力として「理想的」を「理想」から切り離れたが、しかしこの説明は、理想が関与するという作用において感受されるという議論の筋道を正確に逆にたどることになる。こうした「理想=関与」という構成は、互いに説明し合う構造をなしている。デューイが「最も素晴らしいもの」すなわち「理想的」目的や価値の「よさ」について、「外的規準や保障」に照らす必要がないと言うのは、この「よさ」がまさにこうした外的な参照規準を介さずに直接働きかけてくるからである(CF: 33)。この構造で注目すべきは、デューイにおいてこの「関与」という力が、人間を強制し支配するものとして示されるのではないということと、人間の行為にこの力の影響が与える変化までを射程に収めているということだ。実際にデューイは、「関与する想像」が人間の行為を実際に変化させると強調している(CF: 13-16)。

「理想的」と「関与」とを緊密に結び合わせる一方、デューイは、この結び合いが顕在化することまでを要請することで、この結び合い自体を説明できる構造を立てる。「理想的」なものの議論は、こうして人間の行為や活動に場を移したが、我々もそこで人間が体現するなんらかの変化に次の手がかりを求めたい。次章では、デューイが「理想的」目的と「関与」について、時間の中での行為を類型化する視点から説明する箇所を参考に、ともすれば宙に浮かかねない「理想的」を検討していこう。

3. 関与の場：変化

デューイは宗教論で、状況との関わりで表現される人間の態度を三つの類型、すなわち「順応(accommodation)」「適合(adaptation)」「適応(adjustment)」に分け(CF: 12)、この第三の「適応」という態度から「理想」に関与される在り方としての「宗教的」な態度を説明しようと試みている。宗教論で持ち出される「適応」の態度の射程をより際立たせるため、ここでは、「適応」の議論の前史として1919年東京帝国大学における講義録『哲学の改造 *Reconstruction in Philosophy*』(1920、以下RP)の議論を関連する範囲であらかじめ確認しておく。そのうえで、「順応」「適合」そして「適応」の態度を概

観したい。

3.1 適応—衝突—再適応

1919年デューイは東京帝国大学に招かれ依頼講演を行っており、RPはその講演記録がまとめられたものである。人間と状況との関わり方について、その時点でデューイが提出したのは、過度の単純化を恐れずに言えば「適応—衝突（葛藤）—再適応」というセットであった。この図式は彼の講義「経験観念および理性観念の変化」のうちで示されるが、この講義は人間の「感覚」をいかに位置付けるかを巡って展開する。

デューイは感覚を、「今までの適応が中断されたことから生ずる変化のショック」（RP: 130＝清水訳：97）として捉える。外界の状況との不調和を伝えるシグナルとして機能する「感覚」は、本来、極めて実用的な価値の高いものだ。たとえば、鉛筆でノートをとっている人は、鉛筆の芯が折れたり丸くなったりしてしまうと、それまでできていた「書く」行為——ある程度持続的になされているために、短期的には習慣化しているとさえ言える行為——ができなくなる。このとき、「書く」ことのやりにくさ、不調和の感覚が、彼を必要な行動に導く。鉛筆の先端を確認し、削るか、あるいは新しい鉛筆を取り出すというように。こうして「感覚は、行動の再適応（readjusting）の中心点として働くのである」（RP: 131＝清水訳：98）。

このような「適応—衝突—再適応」という図式は、RPのデューイにおいては、二重のイメージが重なったものである。第一に、それは生命過程に見出される基本的な図式だ。たとえば蛤のような静かな貝さえも、じりじりと動いては自らの環境を変えるというように。そして第二に、人間たちの社会に特有な過程もまた、この図式において理解されていく。彼は言う、「私たちは過去を繰り返すだけではいけないし、偶然が私たちに変化を強いるのを待っているだけではいけない。私たちは、新しい、より優れた経験を未来に構成するために、過去の経験を利用するのである。このように、経験という事実そのものが、経験がみずからの改良へ進んでいく過程を含んでいるのである」（RP: 134＝清水訳：104）。

こうして描かれたのは、連続する経験、それも能動的な要素を孕んだ経験である。経験がそれ自体で自ずと進んでいくのは、経験それ自体に、経験して

いる人間の能動的な働きかけが含まれているからだ。経験は行動を含む、あるいは少なくとも導かなくてはならない。このとき「能動的で計画的な思惟」が、経験の過程において固有の地位を得ている（RP: 134＝清水訳：105）。感覚は衝突・葛藤状態があることを伝え、それに注意をむけさせる。この目印をもとにして、人間も蛤も、その衝突状態を調整し再び適応しようと努めるのである。

以上のように整理された「適応」の状態をめぐる言葉遣いについて、デューイは、宗教論で次のように述べる。「順応（accommodation）」「適合（adaptation）」、そして先の「適応（adjustment）」は、同義語として使われがちだが、これらの意味する態度には非常な相違があり、その違いをまず明確にしておく必要がある」（CF: 12）。この三つの適応らしき状態をめぐる思考においてデューイが示すのは、RPで語られた「適応—葛藤—再適応」という基本線に対する注釈以上のものである。本章の残りでは、RPで描かれた「再適応」に向かう人間の絶えざる、しかし直線的なイメージを与える運動との比較を念頭に置きつつ、宗教論で彼が語り分ける必要を感じた「順応」「適合」「適応」の意味するところを確認しよう。

3.2 「順応」と「適合」

人間のいかなる営為も与えられた状況において、またこの状況との関わりの中で、なされるものであるという理解は、CFの中でも前提であり続けている。しかし宗教を論じるためにデューイが最初に着目するのは、所与の具体的状況を人間が変化させたり操作したりすることが往々にして困難であるという事実であり、これは換言すれば「再適応」の困難さにほかならない。彼の挙げる例を見てみよう。たとえば天気の変り変わりは人間には操作しえない。またある人の収入が少ないことは、一朝一夕で改善することが難しい。このような特定の「外的条件が続くと我々はそれに慣れ、習慣づけられ（habituated）、条件づけられる（conditioned）」（CF: 12）。こうして外的条件に習慣づけられ条件づけられた様態を、デューイは「順応（accommodation）」と表現する。

「順応」の態度の特徴は、「第一に、自我全体ではなく行為の特定の形態にのみ変化を及ぼすものであるということ。第二に、順応の過程は主として受動的であるということ」である（CF: 12）。つまり「順

応」の態度においては、自我すなわち人間の意志そのもの・考え方そのものは変化の対象の外におかれ、具体的状況とのやりとりの中でもそれ自身は変わらないままである。そうした変化の外にある人間の意志が自らの本来的な意図に反しながらも、特定の場面でのみ状況を容認し変化を諦めることが「順応」の態度である。

当然ながらこの「順応」の態度には問題点がある。というのもこの態度は、「一般化し、運命論的な諦め (resignation) や服従 (submission) といった態度」へ転化しやすい (CF: 12)。上述した第一の特徴において「順応」は自我全体がとる態度ではないと説明されたが、具体的場面における行為としての「順応」は、それがあまりにも続いたときに人間に恒常的な影響を及ぼすことになる。「順応」すること自体が人間にとって習慣になりうるのだ。もしある人が、恒常的な水害にさいなまれ続けており、また彼がこの水害を防ぐことも被害を軽くすることも難しかったとしよう。彼は水害に対しては次第に慣れてこれを受け入れるかもしれない。しかしそれだけでなく、ある特定の状況における「順応」を通じて、生活の他の条件——たとえば同時に彼の収入が低かったとしよう——についても、習慣化した諦めによって、取り組む意欲をそがれてしまうかもしれない。この敷衍された「順応」の態度は、決定論や運命論的な思考とも親和性を持ち、デューイが退けようとした「超自然的なもの」への盲従を導きさえするだろう。このように、「順応」が連鎖する可能性を踏まえて、デューイは「順応」を問題視するのである。

主として消極性に特徴づけられる「順応」とは対照的に、積極性や能動性によって特徴づけられる態度を、デューイは「適合 (adaptation)」の態度と表現する。この態度は人間が状況を構成する条件を修正し変化させていく。外的な条件の方が人間に「適合」させられるのである。多くの技術的操作、たとえば「外国語の演劇がアメリカの観衆の欲求を満たすために翻案され (adapted)、家が建て直され、電話が発明され、土地が灌漑される」ときなどには、この態度がみられる (CF: 12)。具体的な状況を変化させるという点では、「適合」の態度はRPの「適応—衝突—再適応」の図式の範疇で理解できるだろう。しかしCFで「適合」の態度は批判的に描かれる。というのも、デューイが見るところでは、この外的状況への働きかけ、操作のうちには暴力性が潜んでい

るためだ (CF: 12)。人間が自らの住居を整え、新しい技術を得ることの延長線上には、本来翻訳不可能な芸術作品を他の文化へ向けて仕立て直すという行為があり、自然環境を灌漑によって劇的に変化させる事業がある。外的状況へ働きかけることが人間にとって不可欠の営みであるとしても、この営みは暴力性を兆した「適合」と常表裏一体である。デューイがCFにおいて、「適合」の態度を論じる際の重点はむしろ、こうした暴力への転化の可能性にあったと言えるだろう。

こうして語り分けられた「順応」「適合」それぞれの問題点についてデューイが示した感覚は、彼がかつて示した「適応—衝突—再適応」のサイクルにおいては看過されるものを明るみに出す契機となる。次節では、デューイがCFにおいて定義しなおす「適応」について、確認しよう。

3.3 宗教論的「適応」

「適応 (adjustment)」は、「適応—衝突—再適応」の図式においてそれへ絡みついていた問題が「順応」および「適合」の態度として切除されることによって、より切り詰めて提示される。この態度はまず、その射程自体が他の二つの態度と異なる。というのも「適応」は「周辺環境のあれこれの条件に対するあれこれの欲求についてのものではなく、われわれの存在全体に関わる」ような人間の変化であるからだ (CF: 12-13)。個別具体的な内的欲求や外的状況が変わろうとも、そしてその移り変わりがどれだけ続こうとも、「適応」の結果人間が獲得した変化はその諸変化を貫いて永続する。この変化はより長期間にわたって持続するというだけではなく、欲求や状況の変化とは生じる位相が異なる。「適応の態度とは、意志における何らかの特定の変化であるというよりはむしろ、われわれの存在の有機的完全性 (the organic plenitude) として考えられる、意志「の」変化そのものなのである」 (CF: 13)。「適応」はある具体的な考えの内容についての変化を伴うのではなく、むしろ、人間の基本的な考え方や態度そのものが変化することを意味する。

意志の永続的变化は、CFの「宗教から宗教的」という主張自体に例をみることができる。この例では、「宗教的」態度と手を取り合う科学的な知的探求の姿勢に到達するという変化が生じると整理できる (CF: 18)。科学的な探究、すなわち人間の協同的努

力を通じて継続的に真理が明らかにされていく営みは、知的権威による知識の押し付けを拒否するという意味で、「順応」の態度におけるような受動性ではない。知的権威から提示される知識が鵜呑みにされる必要がない。また、知識の探求者は自らの欲望に従い事実を捻じ曲げるような暴力性を発揮することもなく、したがって自らの欲望に「適合」させることもしない。科学的な探究においては、人間は外的状況に対し暴力的ではないやり方で働きかけ、そこから得られた見地を受け取るという方法を採用する。この方法はその場限りで放棄されるのではなく、それ自身が同じ探究的な検討を経て発展しつつ、継続的に採用されることが可能である、とデューイは主張する(CF: 18)。ここで彼は人々が科学的探究への参与から知的権威への追従へ再び戻る可能性を論じないが、「適応」の態度を理解するという課題においては、さしあたり問題化する必要はない。あくまで重要なのは、知的権威への依存から科学的な知の探究方法への参入へと人間の思考の方法が変化したとき、そこには消極的な諦めとも暴力的な操作とも異なる「適応」の態度が見出されるということである。

しかし「順応」と「適合」との差異という観点から「適応」の態度をとらえるだけでは不十分でもある。実際、この観点で例示された、科学的探求の営みとして顕在化する思考の方法における変化は、RPで確認した「適応—衝突—再適応」の枠組みでも理解可能なものである。つまり制度宗教によって示された教義に従うという態度が、科学的知見と出会うことによって動揺し葛藤状態に陥り、試行錯誤の結果知的に両立する立場、すなわち宗教から「宗教的」なものを取り出しながら科学的知識よりその協同的探求の方法としての側面を強調する、という立場において「再適応」したのだ、と整理することができてしまう。しかし宗教論的「適応」は、こうした「再適応」に収まりきれない別の位相を導入していたはずだ。次章では、この新しい「適応」によって初めて明確に語られることになる固有の位相について検討をすすめたい。

4. 変化の位相

4.1 自発的な服従

宗教論的「適応」の態度は「適応—衝突—再適応」

の経験から、いつ漏れだすのか。この問いに答えるためには、彼がこの態度の核心を説明するために持ちだす「服従」というあり方に着目する必要がある。

この態度 [= 適応の態度] には、服従 (submission) も含まれる。しかしこの服従は自発的 (voluntary) であり、外的に強制されたものではない。(…) 適応の態度は、(…) 単に外的に強制された服従よりも積極的である。(CF: 12-13) ⁴⁾

宗教論における他の二つの態度「順応」と「適合」は、まずその受動性と能動性において明確に区別されていた。この観点から考えたとき、服従としての「適応」はまず「順応」の受動的な態度と見かけ上よく似ている。「服従とは、外的な諸条件・状況に対し、人間が具体的な変化を生じさせようとせず、明示的に働きかけないような態度を意味する」(CF: 12) からだ。ここで確認しておきたいのは、こうした外見上の類似にもかかわらず「順応」と「適応」を区別可能にするのが、強制された態度か自発的な態度かという差異だということだ。したがってまずは「自発性」について彼が意味するところを見ていこう。

「順応」の態度として解されるような服従は、人間にはどうすることもできない外的な状況によって人間に強要された態度であり、このような服従の態度においては、人間が外界に対し示す受動性のうちに、彼自身が価値を見いださず、内的な葛藤状態が存在する。外的条件に従いたくはないが従わざるをえないという意味で、人間の意志は、彼を取り巻くものとも彼自身の選択とも調和していない。

他方で外観上は同じ「服従」の態度が「適応」的であるとき、この態度は内的には「自発的な」ものである。この態度は「われわれの本性＝自然 (nature) の多様な構成要素における調和」(CF: 13) によってもたらされるが、ここで「調和」とは、「適応」の態度に際する意志の変化が、意志そのもののうちに矛盾をきたしていないことを指している。「適応」的な態度はCFでもたびたび描写があるが (CF: 11, 17, 33, 56)、そこで例とされるのは、親や教師、経済的苦難にある人々のあり方である。たとえば、「理想」の作用によって「暗く辛い時期にあって人がやっていくこと」が可能になり、またその作用が「そうし

た時期に一般的に感じられる辛さを消してしまう」ことがある(CF: 11)。葛藤状態をもたらしている状況を、変化させるのではなくその葛藤そのものと折り合うことは、外観上はただ日々を耐える「順応」の諦めともよく似ているが、「適応」的な性質を持つ。

「適応—衝突—再適応」と宗教論的「適応」の射程が異なるのは、まさにここにおいてである。修正された「適応」は、一見して何も変化させず、したがって衝突状態を維持したままの人間を、発見することになる。「適応—衝突—再適応」において、再適応は衝突の段階を規定する不調和を解決することによって訪れる。デューイが「適応」の再定義のなかで否定したのは、あらゆる衝突がその解消において克服されるという直線的に前進する思考であり、彼が示したのは、衝突状態や葛藤状態が消え去らず、具体的な問題への直接的働きかけがないときにも、顕在的变化とは別の位相で生起するものがあるということである。デューイがRPで描いた直線的かつ単層的な図式はCFにおいてはむしろ重層的なものとなっており、もはや一方に進み続けはしない。

具体的課題の克服が「適応—衝突—再適応」のサイクルの始点と終点を決めていたならば、この区切り方は宗教論的「適応」にはもはや適用できない。なぜならこの「適応」は、課題を始点に置きながら、その克服を必要としないからだ。それはいかなる結果や成就、達成とも、もはや必然的な関係を持たないものとして示されている。

先の「適応—衝突—再適応」の終点の代わりに、デューイが宗教論的「適応」の場とするのはどこか。この問いに対する端的な答えとしては、アメリカのデューイ研究者ポアヴァートの整理が参考になるだろう。彼は、宗教論の要となる「宗教的」経験の核心にあるものを「人間の選択によって生み出されたようなものを超えた諸力と協同している、という感覚」(Boisvert 1998: 153=藤井 2015: 206)と説明する。この協同の感覚はそのまま、宗教論的「適応」の態度の核をなしてもいる。

「宗教的」な態度、すなわち「理想」に関与されながら「適応」へとやがて至るこの態度は、参加に関わっている。ただしここでは、具体的参加の実践、動的な行為が問題なのではなく、参加の感覚が焦点にある。この事実、ポアヴァートが「協同している諸力の網の目の部分であるという感覚は、彼 [=デューイ] が信じた「共通の」出来事なのであった」

(208) として「共通の信仰 (a common faith)」の意味を説明したとしても、なお重要である。なぜならここで「適応」は、人間と別の人間のあいだで顕在化する変化ではなく、また彼と事物とのあいだでの変化においてでもなく、他ならぬ彼自身のものとしての感覚おける変化にその位置をとることになるからだ。

「適応が自発的である」というのは、この態度が特定の意思決定 (resolve, volition) によるからではない(CF: 13) とデューイが述べることを考えれば、この感覚が生起することは一つの出来事にほかならない。「適応」という「意志」の「変化」(CF: 13) は、人間が彼自身の意図的な操作で起こせるわけではない。この意味で彼に属さないこの変化は、操作ではなく出来事である。「適応」の言葉で想定されているのは、そのすべてが人間の感覚において起こるにもかかわらず、その到来を彼自身が準備できないような出来事なのである。

4.2 二つの場

ここまで本稿では、“宗教から「宗教的」へ”というテーゼの要を担う“理想から「理想的」へ”というシフトに着目し、このシフトを可能にする構造を辿ってきた。「理想的」性質の核心にあるのは「関与する」という動的関係だが、この「関与」はその影響が具体的な人間の行為の変化に現れることで確認される。しかし人間における「理想的」なものの及ぼす影響は、デューイの議論がCFに固有の論点に到達したとき、外見上の無変化へとそれ自体が姿を変えてしまった。このことを改めて確認していこう。

宗教論における「理想的」についての議論は、一方ではロックフェラー (1991) や鶴見 (1984) がこれまで見出してきたように、デモクラシーやヒューマニズムにも繋がるものである。というのも協同性は「理想的」なものの範疇にあり、またおそらくはその中心にあるためだ。しかし他方で、デューイの「理想から理想的な」という主張においては「理想的」なものの中身は依然として開かれたままでありつづける。そもそも「理想」ではない「理想的」は、その性質がいかなる固定的な価値とも永続的な関係を取り結ばないという条件のもとでのみ可能になる解釈であり、この意味では、宙ぶりの「理想的」は、まさに、宙ぶりのままで検証される必要があった。

「理想的」なものを、いかなる具体的な価値とも確

定的には結びつけられえないものとして描くなかで、デューイは「理想的」という性質をさらに別の性質——すなわち、人間に対する「関与」という性質へと言い換えていく。しかしこの言い換えは、具体的価値を語ることを回避させるかわりに、関与の対象すなわち人間の“何に”対する関与なのかについての説明を要求した。そこでは、行為や活動のみならず、態度や感覚への関与が強調される。その結果、宗教論は「適応—葛藤—再適応」にみられた直線的な枠組みから抜け出て、衝突・葛藤状態の解消をかならずしも伴わない新しい「適応」を射程に収めることになった。しかしこの議論は、さらにまた別の問いかけを喚起している。

「関与」するという性質に照らして整理してみよう。デューイの宗教論は、「理想的」すなわち関与する目的と関与される人間とを主題として描写しながら、その目的と人間とが引き合い溶け合う「関与」については二つの異なる場を設定している。それは第一に、目的と人間とが引き合い、その魅力が成就して具体的活動としてあらわれてくる場である。しかしこの具体的で外面からも容易に観察可能な変化の場は、外見上は変化しないケースを取りこぼす。この取りこぼされたものを再び掘り上げるのが、外見からはわからない内面での調和としての「服従」という観点である。デューイが導入する第二の「関与」の場、それは、こういってよければ人間の内面である。デューイの宗教論は「関与」という論点を介することで、行為における変化だけでなく、身体の振る舞いや具体的な選択やその結果における変化にだけ着目してはとらえきれない、感覚において到来する変化をもとらえ、この二つを折り重ねて射程に収めている⁹⁾。

この二つの場は、CFにおいて描かれた人間の生の複層性としてとらえることができるだろう。一方で人間は「適応—衝突—再適応」という前進する絶え間ない動きとしての生をいきている。しかし他方で、衝突状態に落ち込んだ人間が、適応状態の間で見せる生の様態がある。このようなあり方は、「再適応」のために克服されるべきものとしてではなく、それ自体固有な位相における変化とみなされる。宗教論的「適応」は葛藤を解消しない。したがってCFの中には、衝突や葛藤状態を克服することによる生とともに、衝突や葛藤状態を解消せず抱きしめることで生きられるような生が然り合わされていると言える

だろう。

しかし、以上の整理をもって「理想から理想的へ」という議論の一連の展開がもたらしたものを肯定的にのみ評価することは難しい。たしかに一方では、宗教論的「適応」において端的に示されるとおり、「理想的」へのシフトは、常に具体的な衝突から具体的な価値を描くことで成立する「適応—衝突—再適応」のサイクルが持つ暴力性を問題化する必要性を明確に提示する。さらにまたこの見地は、「服従」としての「適応」、すなわち「再適応」しえないことにおける「適応」という異なる位相を指し示し、人間の生の複雑さを捉えようとするものでもある。しかし他方では、この新しい「適応」を語り分ける際、デューイは態度と感覚に言及することになり、結果として彼の描く関係的な図式はその掛け金をいくらか人間の内面へと差し戻している。顕在的な変化——衝突の克服や人間の具体的操作の成功を必ずしも伴わない宗教論的「適応」の態度は、それゆえに外観上は消極的諦めの態度としての「順応」と見分けがつかない¹⁰⁾。

5. おわりに

本稿でたどってきたのは、ある概念を「関係」という視座から解釈することが、別の関係的解釈を呼び込み要請していく様であり、ひいてはそうした関係的解釈の連鎖がまさに関係の成立しえない地点へと向かうことになるという構造である。「理想」を「関与」によって見分けられる「理想的」なものへとずらすことで、デューイの議論が二つの場で展開されることになったのは、先に確認したとおりである。いかなる活動、行為にも顕在化しないものとしてとらえられうる、内面という場を議論の射程に収めることは、一方ではデューイ宗教論における人間の生の把握により深みをもたらししている。彼の宗教論は、「適応—衝突—再適応」のサイクルの淀みをとらえ、適応の切れ目に触れる可能性を秘めている。しかし他方で、容易には説明されえないもの、少なくとも関係の単純な捉え方では説明不可能なものを、内包することになった。というのも、宗教論の構造は、「順応」と「適応」という二つの態度を分かちつもの、準備することも、また他者が観察することもできない場所へ預けたことになるからだ。この宗教論の多面性をすぐに評価することは難しいとしても、手が

かりがないわけではない。主体と客体という伝統的区別をある程度残したままで、内面をデューイが論じようとしたのは、彼がまだ若く心理学に傾倒していた時期である。デューイの初期心理学の著作群へと遡求し、そこで示される内面についての議論と、CFという後期宗教論における議論とを照合し、同型なものの変化したものを取り出すことは、本稿が行き着いた課題になんらかの光を当てるだろう。

<引用文献>

- Biesta, Gert J. J. 2014 *The Beautiful Risk of Education*. Boulder, CO: Paradigm Publishers.
- Boisvert, Raymond D. 1998 *John Dewey: Rethinking Our Time*, Albany, NY: State University of New York Press. = 藤井千春訳 2015 『ジョン・デューイ——現代を問い直す』 晃洋書房。
- Dewey, John. 2008 *The Collected Works of John Dewey, 1882-1953*. ed., Jo Ann Boydston. Carbondale, IL: Southern Illinois University Press (Early Works=EW, Middle Works=MW, Later Works=LW).
MPC="My Pedagogic Creed" (1897, EW2)
RP=*Reconstruction in Philosophy* (1920, MW12)=清水幾太郎、清水禮子訳 1968 『哲学の改造』 岩波書店。
EN=*Experience and Nature* (1925, LW1)
QC=*The Quest for Certainty* (1929, LW4)
CF=*A Common Faith* (1934, LW9)
- Dykhuizen, George. 1973 *The Life and Mind of John Dewey*. IN: Southern Illinois University Press. = 三浦典郎、石田理訳 1977 『ジョン・デューイの生涯と思想』 清水弘文堂。
- 上寺常和 2013 『デューイ宗教論の射程——「道徳」としての「誰でも信仰」』 北樹出版。
- 森田尚人 1999 「ジョン・デューイと未完の教育改革」 原聰介ほか編 『近代教育思想を読みなおす』 新曜社。
- 大竹真樹 2013 「後期デューイ宗教論における「宗教的なもの」に関する考察：神概念の検討を通して」 『東京学芸大学教育学講座学校教育学分野・生涯教育学分野 教育学研究年報』 第32号、39-56頁。
- Rockefeller, Steven C. 1991 *John Dewey: Religious Faith and Democratic Humanism*. NY: Columbia University Press.
- 佐野安仁 2003 「デューイの宗教論」 杉浦宏編 『現代デューイ思想の再評価』 世界思想社。

- 田中智志 2011 「教育批判の根拠——デューイの共同性と宗教性」 『近代教育フォーラム』 第20号、133-142頁。
- 田中智志 2015 「デューイ教育思想の基礎——自然の呼応可能性」 『大正新教育の思想——生命の躍動』 東信堂、34-61頁。
- 田原善郎 1988 「デューイにおける「宗教的なもの」と理想的信仰」 『茨城大学人文学部紀要 人文学科論集』 第21号、109-136頁。
- 鶴見俊輔 1984 『デューイ』 講談社。

注

- 1) たとえば、「私の教育的信条 My Pedagogic Creed」(1897) において教師は「神の預言者」と表現されるとともに、その全体が著者であるデューイの「私は信じる I believe」という文で構成されている。あるいはまた、彼が後期に発展させる形而上学的思索についての大著『経験と自然 *Experience and Nature*』(1925) の第10章でも、知的検証や批判の意義を論じる中で「信念・信仰(belief)」があつかわれており、宗教論へ流れこむ「信仰(faith)」の捉え直しが進んでいることが垣間見える。
- 2) より直接的には、当時の有力な自由主義神学者ウィーマン(Wieman, Nelson)ら編著の『神はいるのか?——一つの対話 *Is There a God: a Conversation*』(1932)をめぐって、ウィーマンとデューイがクリスチャン・センチュリー *Christian Century*誌上で交わした議論がきっかけとなったとも指摘される。なおウィーマンとデューイの論争については、大竹(2013)の概要整理がある。
- 3) その結果、デューイの「宗教的」なものや「理想的」なものの議論は、寛容な多元的宗教主義へと重ねられることが多い。教育学において、こうした視点からデューイ宗教論を読み解いた近年のまとまった研究として、上寺(2013)。
- 4) 「服従(submission)」は、その出自自体が検討を要するものでもある。真っ先に想起されるのはキリスト教的「服従(obedience)」である。ただしデューイにおいて、外的諸条件に対する消極的な態度が「順応」として語り分けられていること、また宗教論全体の「宗教から宗教的へ」というテーゼが外的権威の言葉に服従するあり方を否定することに、留意する必要があるだろう。自らを投企し明け渡すこと(submit)は、物理的自然や社会的組織の強圧的な力に対する隷属ではなく、何か別のものへの感応のうちでなされる事態を指して選ばれた

語彙でありうる。この点についても、Biesta (2014)、田中 (2015) が既に一定の方向性を示している。

- 5) この点については、田原 (1988) が指摘し部分的な考察を行っている。
- 6) 以上のように考えたとき、デューイの宗教論を段階的発展の構造として整理することはできないことは明らかだ。ロックフェラーは、デューイがQCで整理した「世界を理想化する3つの方法」(QC: 240-241)を段階的にとらえ、それがCFで完成される宗教論の発展と重なりあうと主張する。彼が提示した段階的理解は、(1)若くしてデューイが断念した確実性の探究に始まり、(2)情熱と精神が駆動する価値づけを経て、(3)知性と情熱との統合に至る、というものである。最終段階としての統合は、「理想的」なものへの帰依 (devotion) のうちでな

される実践的活動 (practical action) において見出されるとロックフェラーは言う (Rockefeller, 1991: 26)。しかしCFの議論の中心を担う「理想的」なものへのシフトは、突き詰めれば、顕在的な行為や活動として捉えられるかは自明ではない態度へのまなざしを要求する。「再適応」のようないかなる達成、成就ともかわらないこの宗教論的「適応」の態度が、いかにして準備されるのか、またこの態度がいかにして「適応—衝突—再適応」という前進する生へと再び触れるのかは、デューイはCFでは論じない。かわりに示されるのは、人類の共同体が実際にこの複層的な深みを持つ生の営みをなしてきたという事実であり、そしてこの事実に基づく現在の人間たちの責任である (CF: 42-43)。